

初期仏典と古ウパニシャッドにおける 見聞覚知表現について

橋 本 一 道

1. はじめに

古ウパニシャッドと初期仏典においては類似する表現が種々みられ、それらについて思想的にどのような関連性があるのかを検討する必要がある。この検討にあたり本稿では「見る ($\sqrt{dṛś}$)、聞く ($\sqrt{śru}$)、思う ($\sqrt{man}$)、認識する ($vi-\sqrt{jñā}$)」(以下、見聞覚知)の語を用いた表現に着目する¹⁾。

初期仏典の最古層に位置付けられる Sn.IV, V において見聞覚知表現が多くみられるが、かかる対象が示される用例が少なく読解が困難である。けれども、この表現は基本的に仏教からみた他教の主張を示していること、また釈尊の年代が古ウパニシャッド最古層の発達期に続くものであるという時代性により、BĀU や ChU などの古ウパニシャッドに用例を求められる可能性が高い。

そこで本稿では、管見の限り先行研究²⁾であまり取り上げられていない ChU を中心に、古ウパニシャッドにおける見聞覚知表現を分析する。そして、古ウパニシャッドにおいては「見聞覚知する・されることを肯定する」場合と、「見聞覚知しない・されないことを肯定する」場合とがあり、前者は「教説もしくは宗教的实践によって知ること」を意味し、後者は「アートマンの性質による否定表現」であることを述べる。また「見聞覚知しない・されない」表現に基づく初期仏典の解釈の可能性についても言及したい³⁾。

2. ChU における見聞覚知表現の諸相

ChU では VII.8, 9, 13, 15, 24, 25, 26 において見聞覚知表現がみられる⁴⁾。それぞれ 15, 25, 26 は「見聞覚知することを肯定する」用例であり、24 は「見聞覚知しないことを肯定する」用例である。なお、24 の用例は「見聞覚知しない」ことを「不死」として肯定しつつ、「見聞覚知する」ことは「死すべき」と明確に否定するところに特徴がある。残る 8, 9, 13 は特殊な意味を持たない「一般的な動詞」と

考えられるので、本稿では割愛する⁵⁾。

2.1. 「見聞覚知することを肯定する」用例

ChU.VII.25.2 (cf. ChU.VII.15.4, 26.1)

さて、この故に、まさに「アートマン」による等置がある。まさにアートマンは下にある。
…まさにアートマンはこの一切である。実に、このように見て、このように思い、このように認識しているそのような彼は、アートマンを楽しみ、…彼には一切の世界において自由な行動がある。…

ここでは、アートマンは上下東西南北にありこの一切であると見聞覚知する者には一切の世界における自由な行動などの果報があると説かれる。これらのような「見聞覚知することを肯定する用例」では、まず教説が示されてから、これに従って「このように見聞覚知する」と説かれる。この場合この表現は、アートマンなどを文字通りに「見たり、聞いたり」するのではなく、これらを「教説に従って知る」ことを意味すると考えられる。またこの他 BĀU.IV.5 などでは、ヤージュニャヴァルキヤが「アートマンを見聞覚知するべき」として出家遊行に出ていることから、教説のみでなく「宗教的实践によって感ずる」というニュアンスも見出せる。これらのことから、「見聞覚知することを肯定する」場合は、「教説もしくは宗教的实践によって知る」ことを意味すると考えられる。

2.2. 「見聞覚知しないことを肯定する」用例

ChU.VII. 24. 1

そこにおいて他のものを見ず、他のものを聞かず、他のものを認識しない、それは豊富である。一方、そこにおいて他のものを見て、他のものを聞き、他のものを認識する、それは僅少である。実に、豊富であるものは不死のものである。しかれば、僅少なものは死すべきものである。…

ChU.VII. 25. 1-2

まさにそれ（豊富）は下にある。それは上にある。それは西にある。それは東にある。それは南にある。それは北にある。まさにそれはこの一切である。さて、この故に、まさに「私」という言葉による等置がある。まさに私は下にいる。…まさに私はこの一切である。
さて、この故に、まさに「アートマン」による等置がある。まさにアートマンは下にある。…まさにアートマンはこの一切である。

まず「豊富 (bhūman)」ということについて、「他のものを見聞覚知しない」と説かれ、次に「豊富」が「私」を通じて「アートマン」と等置されている。なぜ「豊富」の境地であると「他のものを見聞覚知しない」のかというと、それは

「豊富」が上下東西南北にあるという遍在性によるものである。つまり「豊富」は「遍満」を意味していると考えられる。この「豊富」と共通する遍在性を有する「アートマン」を体得した者は「他のものを見聞覚知しない」、すなわち「何かを認識対象として対象化することがなくなる」ことを示している⁶⁾。

このような「見聞覚知しない」という表現は、2.1.のものとは明らかに趣意が異なるものとなっている。すなわち、アートマンの性質に基づいて、文字通りに「見たり、聞いたり」しないことを表している。総じて、「アートマンは見聞覚知されない」ものであり、かつ「他のものを見聞覚知しない」ことを理想の境地とし、「見聞覚知する」ことはその逆であったということである。「見聞覚知しない」表現の場合、この表現は必ずしもアートマンを対象に取らず、あくまで二元性の排除を説くことを意図しているという点に注目すべきである。

3. Sn. IV, V の見聞覚知表現

難解である Sn の見聞覚知表現について、前述の用例に基づくことで、ある程度可能性を限定できよう。例えば Sn. 1079⁷⁾ では見聞覚知されたものによる清浄が述べられるが、古ウパニシャッドにおいて見聞覚知表現を用いて理想の境地を説く場合、その意味は2.1. か2.2. のものとなる。これによって Sn. 1079 以下を解釈すると、まず2.1. の場合は単なる他教説批判ということになる。すなわち釈尊が、「アートマンなどが見聞覚知されたことによる清浄を主張する者たち」は「生まれることや老いることの苦しみを渡り越えることはなかった (Sn. 1080)」として彼らを批判し、「見聞覚知されたものを放捨すべきである (Sn. 1082)」と主張することになる。ところがここに2.2. を加味すると、釈尊の主張と古ウパニシャッドの思想に近似点を見出す解釈ができる。すなわち、アートマンはその性質によって「見聞覚知されない」ものであり、従って「見聞覚知しない」のが理想の境地である。それにも関わらず「見聞覚知されたアートマン」「見聞覚知すること」による清浄を主張する者がいて、釈尊は彼らを「見聞覚知されるものはアートマンではない」「見聞覚知することを放捨すべきである」として批判するのである。

4. 結びに替えて

古ウパニシャッドと初期仏教との関連性は種々の道筋が複雑に絡み合っているものと考えられる。その一端として、「見聞覚知しない・されない」アートマンによる関連性を提示する。初期仏教における an-ātman を解釈するにあたり、釈

尊がこのような「見聞覚知しない・されない」アートマン観を継承して非我・無我思想へと発展させたと考えることができるのではないだろうか。

- 1) 見聞覚知表現には、増減含め項目数が一定していない用例が多くみられる。しかし ChU.VII.24.1 のシャンカラ (700–750 頃) 註に示されるように、たとえ項目数が足りなくても、それは他を含意する省略表現と考えられる。註 5 も参照。
- 2) Jayatilleke [1963], Bhattacharya [1980], 荒牧 [1983], 宮坂 [2002, pp. 420–422] など。BĀU の見聞覚知表現についてはこれらを参照。
- 3) 大会での発表後、大阪大学の榎本文雄先生、堂山英次郎先生より貴重なご意見をいただきました。記して謝意を表します。
- 4) この他、ChU.VI.1.3 の見聞覚知表現も注目すべきである。「教学に従って知る」具体的方法となるのが「念想 (upāsana)」や「等置 (ādeśa)」ではあるまいか。
- 5) 項目数の増減や一般的知覚を表す用例は、これらの表現が元々は一般的な知覚を表すのみであり、次第に教説に従った理解に関連する語が選抜され定型句となっていくことをうかがわせる。
- 6) 「アートマン以外のものは見えない」と表裏一体であろう。なお二元性の排除によって認識対象を失うことは、BĀU.IV.5.15 (≡ II.4.14) にも確認できる。
- 7) Ye kec' ime samaṇabrāhmaṇāse icc-āyasmā Nando, diṭṭhe sutenāpi vadanti suddhiṃ, sīlabbatenāpi vadanti suddhiṃ, anekarūpena vadanti suddhiṃ, kaccim su te Bhagavā tattha yathā carantā, atāru jātiṃ ca jaraṇ ca mārisa, pucchāmi taṃ Bhagavā, brūhi me taṃ (Sn. p. 208).

〈略号表〉

- Sn *Suttanipāta*. Ed. Dines Andersen; Helmer Smith. London: Pali Text Society, 1990.
- BĀU *Brhadāraṇyakopaniṣat: Ānandagirikṛtāṭikāsaṃvalitaśāṅkarabhāṣyasametā*. Ed. Kāśīnātha Śāstrī Āgāṣe. Ānandāśrama Sanskrit Series, vol. 15. Puṇyākhyapattane [Poona]: Ānandāśramamudrṇālaye, 1953.
- ChU *Chāndogyaopaniṣat: Ānandagirikṛtāṭikāsaṃvalitaśāṅkarabhāṣyasametā*. Ed. Kāśīnātha Śāstrī Āgāṣe. Ānandāśrama Sanskrit Series, vol. 14. Puṇyākhyapattane [Poona]: Ānandāśramamudrṇālaye, 1934.
- Ten Principal Upaniṣads with Sankarabhāṣya*. Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass, (1964) 2015.

〈参考文献〉

- Jayatilleke, K. N., (1963) 1980. *Early Buddhist Theory of Knowledge*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Bhattacharya, Kamaleswar. 1980. "Diṭṭham, Sutam, Mutam, Viññātam." In *Buddhist Studies in Honour of Walpola Rahula*, ed. Somaratna Bālasūriya, 10–15. London: Gordon Fra ser.
- 荒牧典俊 1983 「Suttanipāta Aṭṭhakavagga に見られる論争批判について」高山寺大学仏教学研究室編『中川善教先生頌徳記念論集 仏教と文化』同朋舎, 117–146.
- 宮坂有勝 2002 『ブッダの教え——スッタニパータ——』法蔵館。

〈キーワード〉 見聞覚知, Chāndogya-Upaniṣad, Brhadāraṇyaka-Upaniṣad, Suttanipāta, ウパニシャッド, 初期仏教

(龍谷大学大学院)